

青年時代

再び濱木屋に入りて

在營三ヶ年間、出征中と雖も唯だ濱木屋に歸りて林木業に従ふ事のみを唯一の楽しみと凡てに空想を走らせて歸名し、愈々濱木屋に落ち付き、主家の現状を熟視するに及び意外にも濱木屋の現状は財政上にも營業所も面白がさる状況にて、今日迄の戦地に於ける想像は暁の霜の如く消え去り、その失望、落膽はけだし言語を絶するものがあつた。或る時親戚とも相談し此際主家を退身して自己の方針を立て直さんとまで決心したこともあつたが先輩たる伊藤千吉氏の切なる勧告挽き止めに逢つた、當時伊藤氏の言に、

「目的地は太平洋の彼方と假定し、お互にこの目的地に向つて一同横濱を船出したとして太平洋の荒波の上で君獨り下船すると云はれるのを黙視出来るか、たとへ行く手は難航でも苦樂を俱にして目的地まで到達されたい。」

と懇請され行方は時化か風かは知らねどもお互に運、不運にもあるし、又或る程度協力して努力すればたとへ難局と雖も打開することも不可能でないと思へ直して退身を思ひ止つた、が仕事に従事すればする程凡ての營業上、及び其他の面自からざる点もあり、且つ著者の上には尚ほ河村彦助、政木安三郎、伊藤千吉、相羽恒次郎、渡邊劍次郎、成瀬利三郎等の先輩があつたし暫くの間軍隊生活をしていた關係上實務に遠ざかつていたため、自己の意見を通さんとすれども通されない立場にあつて或る時はむしろ自暴自棄に陥入つた事もあり、然しこの時の行動に對する主家の寛容な執成と先輩各位の庇護とに依つて解雇もされず又暇もとらず、月日を送つてゐたのである、三十九年七月普通ならば直接主人と對座は出来ないのであるが親戚へ來られたのを機として長時間對座的に營業方針に就て自己の抱蔵する意見を吐露した、即ち主家のこの難局を打開するには山林事業を置いて他になしと力説進言した處主人も若輩の言をよく了解され然らば君の言を用ひて山林部へ出掛け出來る限りの努力をして欲しい、依つて山林事業で成功すれば特別賞を出すとまで言はれ

ひだのくにましかんまぜむらあさしちやまあつたに
勇奮躍如として飛驒國益田郡馬瀬村字下山厚谷の濱木屋出材事務所へ向けて出發することとなつた。時に明治三十九年八月お盆の前であつた。主人夫妻はせめて盆をすませてゆくり休んでからにしてはと温い言葉を向けられたが既に意中決するところのあつた著者は

「商人が家を一步出ずれば武士が戰場へ出るのと同じである、なんぞ盆も正月もあらんや」

と當るべからざる大勇猛心にもえつゝ出發したのである、現今とは異なり交通不便なることは名状すべからざるもので、文字通りの深山幽谷、峨峨として切り立つ岩山、千仞の谷石塊の小径、想像はしてゐたるも少くとも濱木屋出材部と堂々と刷り込んだ封筒等を用ひられてゐるから、多少みられる社屋もある事と信じて登山したのである。

困難なりし登山

輕装に身を固め早朝名古屋市東區清水口迄徒歩にて出掛け清水口乗合馬車出發所にて馬車に乗者犬山に向ふ、犬山より鷓沼に渡つて之れより再び馬車便によつて太田迄出で、此處で仲繼ぎし下麻生へ夕景に到着する。翌日は下麻生より徒歩にて荷物を肩に振り合け、しせあそつ「七宗」越入をなすのである、しせあそつ七宗は當名古屋より一番近い御料林で極めて立派な美林である、しせあそつ下麻生から飛驒金山迄八里二十六丁の道程があるが平地でなく峻阪、急阪の連続で

あり、峠の如きも小徑とは云へ殆ど岩石露出の部分が多く、歩程容易に抄らない、眞夏であるし阪道で暑い砂ぼこのサクサクの道を辿るのだから全身びつしよりとぬれぬところない位に全く流汗淋漓の文字通りの汗まみれとなつて目的地に向ふ様は今想ひ出しても良くもあゝした難行にこらへながら歩いたものだと懷舊の念に堪へない、然し林木に生き、林木と共々の暮しを我が信條と心に決し尙ほ新しき事業に對する意氣込を烈々と燃へ立たせてゐたから、難コース何者ぞと苦しみをじつとこらへながら山路をたどる。

現今では下麻生邊りから飛驒金山を経て下呂近在迄、又それから遠く飛驒金山迄は絶景天下に名だゝる觀遊の勝地で車窓からの眺めは右に左に應接にいとまなき飛驒川、益田川の清流を見るのだが、この頃は勿論汽車の便があるう筈なく、自動車も都會に於てさへ稀に存在する程度で凡ては足が最大、最強の交通機關であつた、最近著者が商用で飛驒高山ひだたかやま或ひは遊山に下呂等へ出掛ける時、車窓から過去の自分の姿を森陰に見出す様な幻影をしばしば眼前に見る、そして秀でたる山肌、勝れたる樹林、山水畫に見まはほしき風景を眺めて、それが曾遊の地でなく、苦難の道の一つであつたと思ひ實に何とも名状すべからざるメラノコリーにひたる、同時に過去の一頁に終生忘れ得ざる苦しい想ひ出を持つ自分に

ほゝゑましいいたはりの氣持を持つのである。七宗御料林の實に立派な立木の間を暑さを
しのぎつゝ越へて行く、はるかに飛驒川の急湍が寛達な濃尾の平野へいそぐ進軍の響を立
ててゐる、重疊と織りなす山々は雄大な姿もて我が苦行の道をじつと見つめてゐる、目的
地たる益田郡馬瀬村字下山厚谷は未だこれより深い山々の間にあるのだ、遊山の自分ではな
い急ぎの旅をかこちつゝ歩を早める、滿洲の荒野を幾轉戦、荒れに荒れまはつた自分だが
眞夏の山路は流石につらい、足には底豆を生じ、草鞋三足を費して漸くにして飛驒金山の
宿へ引づる様に着いたのが午後七時である、飛驒金山では先輩相羽恒次郎氏の案内で井桁
屋に投宿することを得た、足の痛み、疲労其極に達しその苦痛はたとへ様がない位であつ
た、金山の宿は馬瀬川と益田川とが合流して飛驒川と名を變へる分岐点である、益田川は
遠く信濃と飛驒の國境御嶽山の西北隅を源とし灌流下るに従つて愈々早く野麥峠をはるか
に眺め、渚、小坂と經て益々急湍の姿を整へる、その外無数の小川を合して上呂、萩原中
呂、(禪昌寺)、下呂邊りから有名な中山七里の溪谷美を見せて金山まで、この川の思
恵は限りなく飛驒の國々に幸をおしみなく與へてゐる。一方西の方馬瀬川はその本流を
飛驒の國大野郡清見村のあたりに發して大原の寒村を過ぎ、川上、芋島、黒石の邊りより水
嵩も増して馬瀬川の南北七里にわたる山野を下り、郡上郡に入り祖師野より和良川を合し
て一氣に金山へ奔流の勢ひは強まるのである、かくして金山でこの兩川合せ太まりて飛驒
川の本流となる。金山の宿で充分昨日の疲れを休めた著者は、荷物は馬車便に託して深谷
經由送荷をなし身輕と、なつて跛をひきつゝ出發、馬瀬川に沿つて祖師野、相原と郡上の
地を遊行して五里、卯之原新田と呼ぶ僻村を最後として飛驒の國へ入り、痛む足をふみし
めながら下山村へ着いて、休む間もなく山の事務所へ愈々急な胸つき一里を辿るのだ、今
までは縣道乃至郡道で道らしい道を通つて來たのだが、之れよりは道はなく、文字通りの
草を分け、木をよじて岩にすがり難行せねばならぬ、途中に不動瀧といふ瀧がある、こゝ
に於て先輩相羽氏曰く

「この瀧の水は動いているが不動瀧である。君が山を登り事務所に入ればどの様な苦勞
があらうとも、動かざる事不動の如しで水は動くが身体は動かすな。」

此の言葉を心に銘じつつその瀧を右手にエス字形を描ひて山を登る、斯の如き深山に人
家の果してあるかを疑問として登る事一里餘にして人家二戸あり、事務所の所在を聞くに
其處にあるといふ、これが厚谷の事務所である、みれば彼方に丁度芝居で觀る大安寺堤の

蒲鉾小屋に等しい一戸がある、入口には蕙がつるしてある。之れを眺めた時の心中は唯だ驚愕あるのみであった、まづ蕙をあげて入れれば七十餘の老人が居て

「帳元さんよく来て下さった」

まづ上つてくれとの事にみれば蕙とは名ばかりの黒ずんだものが並べてあり、そこへ出された茶が何とどうも其色はむしろ黒色、茶碗は茶澁に染り何とか飲まんとすれども咽喉に通らずといふ有様、茶釜は諸所缺けて古色蒼然たるもの、自在鍵も亦よくもすゝけたものだといった形ちで、言ひ知れぬ感じを受ける、次で奥の間に案内され、中の間を通つて入れば六疊位の一室で、疊とは名ばかりにて下には粗朶を積み、その上に薄べりが敷かれてある有様である、待つこと暫くにして事務員等一同が下山して来たが、其挨拶が亦頗る嚴格で秩序整然たるものがあるのに異様な感じを受けた、即ち山法さんぽうとて之れは尾州徳川藩時代以来の美風が尚ほ現存してゐるもので其の階級制度の嚴然たるは他に類が少ない、夜となつて、さて就寝しようとするにこの三日間も續いた難行程に身体は綿の如く疲れ切つてゐる事とて熟睡する筈の處、心が緊張してゐる爲か、谷川の永瀬の音と農家の水車の廻る音が耳について眠れず、且つ蚤が身体を持ち上げる位多く、到底一睡も出来さうに

ないため止むなく深夜米俵の上に枝を並べて寢具を敷き眞裸で再び寢についたが之れでも一睡も出来ず白々明けを迎へた、翌日は朝食も疲労と不眠のため少し食べたのみにて半病人の状態で寢込んでしまつたのである、之れが登山第一の苦しみであつた。

次いで山の事すべて見るもの聞くもの、事毎に想像外の事のみで又食物の粗惡なること言語に絶し、味噌、荒布、豆位が主なる副食物で米の粗惡なこと、煮物等も殆ど食鹽のみで味つけをするので、これ等の經驗なき著者の苦痛は格別であつた、一方事務の上から觀

あめのみ

ても殆ど文盲で自分の想像とは雲泥の相違である事にも驚かされた。山仕事の順序は風呂

いせんまは

たき、飯たき、菜煮、食器の洗廻し等を一日、二日やり、それが終ると山へ行き不參廻りする、切判切りもする、それから初めて目拾ひとなり次いで帳簿の整理、その次が帳元となる、かくて金銭出納を取扱ひ元締代となる順序である、著者も將來人を使役する立場になるには一と通りはどの仕事もやっておく必要があるとて慣れない仕事のため誠に苦痛であつたが十日間程は無我夢中で過した、が如何にしても居たたまれないので名古屋へ歸つてしまつた。さうすると主人や先輩に意見され再び苦しみに堪へやうと覺悟を呼び起し勇を鼓して歸山したのである。

歸山の途次著者は林木業を斷然癡めやふと飛驒川ひだの巖上(下山村釜と云ふ名稱の場所)に座して三時間あまりも色々と苦慮したこともあった、が自己の初志を思ひ、先輩各位や、御主人の言葉を想い起こして決然と山へ向つた、入山後は一生懸命に仕事に従ひ、一ヶ月、二ヶ月と時の経過と共に自分の職務にも趣味を生じ、粗食も蚤の苦しみも事業上の希望に燃ゆる氣持から、進んで如何なる困難にも打ち克つて進まふといふ勇猛心を奮起こし、山の跋涉も反對に愉快となつて來たのである、斯くして山仕事に精勵しつゝ九月の秋彼岸頃より順次土入れをすまし馬瀨川ませの急流を莊嚴雄大な響をたてゝ自分の伐採搬出させた木材が管流する様になりその時の感慨こそ實に言ひ表し得ない愉快さであつた、身は帳元、元締代として尊敬され、村々に行つても歡待され、頗る滿悅の氣持ちとなつて將來立派な山林伐出業者とならうと一層精勵に精勵を重ね幾多の苦心、慘澹たる努力の結果枕木一萬三千挺、木材尺々三千五百本を流下した、これにより約三千五百圓餘の純利益をあげたのである、この時の投下資本は五千五百圓であつた、そこで著者は主人に次の様に申出た

「事業の究極の目的は儲けにあるから仕事の途中で先輩や其他の意見は充分聴くが事業上に兎や角と容喙ヨウケされることは喜ばない、自分の心魂を打ち込んで儲ける事に一意努力

する考へであるからそれを許されたい、投下資本に對する儲けは少ないかも知れぬ且つ事業も小さいが階段は一段一段と上るべきで小刻みに目的地へ進みたい、それ故に本年の利益の内來年はその純利益だけ資本に加算してほしい、今假りに六千圓の資本に三千圓の利益金が上つたとすれば尚三千圓を加へ合計一萬二千圓を仕込金としてもらいた

一五

この進言を主人は認められて、前述の五千五百圓の投下資本に三千五百圓の利益と更らに右の承認に依る加算金三千五百圓、計一萬二千五百圓の仕込金を以て明治四十年は計畫を進め岐阜縣益田郡中原村字久能川を中心として火打、美濃國加茂郡佐見、黒川方面に於て枕木を主として多少の松、杉、檜、樅等を伐出し四十年度は約五千圓程の純益をあげ得たのである。茲に於いて主人は非常に之れを喜ばれ次年度の四十一年も一層の活躍を望まれ

たとへ借金をしてゝも仕込みをするからと鞭撻の言葉を受け勇躍恵那郡福岡村柏原を中心
まじだぐんなかほむらあさくのがわ ひうち みのくにかもくんさみ くろがわ
あなぐんあひむらかひばり
に黒川、蛭川、東白川等で従前の如く枕木を主とし杉、檜、松等の伐出を行つたが此の年は不幸にして一ヶ所山の觀測を誤りしたため損失はなかりしも不成績を招いた、即ち二萬二千五百圓の仕込金に對し純益金僅かに二千八百圓であつた、之の成績状態に依つて著者は

山林伐出事業が順風に帆を孕むが如く行くものではないといふ苦しい體驗を得たのである。

主人の急逝

明治四十二年には前年の屈辱を注ぐ大決心のもとに岐阜縣加茂郡佐見村字稻田に於て山林事業を開始し、事業も順調に進行の緒につきしに悲しむべし、好事多魔の例に漏れず四月四日主人の急逝の悲報に接したのである。

この急電に接し急遽歸名葬儀萬端も相濟んだが相續者貞次郎氏一身上の種々なる千系上多少の紛叫もあり、旁々濱木屋は組織を變更する事となった。

濱木屋

合資組織となる

この組織變更に當つては材摠の主人鈴木摠兵衛氏が色々干與、教導されて合資會社を設

立する事となった、資本金は二萬五千圓で先輩政木、伊藤兩氏が代表社員となつて著者は五百圓の出資社員として再び佐見村さみの事業をこの苦境の内に經續することとなった。

かねがね主人との間に前記の如き一つの堅き約束が交されてあり、それに基いて事業上に努力の限りを盡して來たのであったが、柱とたのむ主人の急逝に逢つて挫折に近づいた事が何としても殘念に堪へられなかつた、が之れも一つの因縁と諦め一意恵心事業に盡瘁したのである。

「編者附記」明治三十九年著者凱旋の年より明治四十二年濱木屋合資組織に至る四ヶ年間に於ける世情一般に就て附記すれば。

明治三十九年三月鐵道國有法が公布せられて明治四十年末までに主要線十七鐵道、開業哩數二千八百二十二哩の買上げを決定。越へて同三十九年五月鐵道五千哩祝賀會が開催された。年末たる十一月に至り南滿州鐵道株式會社設立され、株式公募數九萬九千株に對し應募數は實に千七十倍たる一億六百七十三萬株に達し誠に稀世の盛況であつた、特に五圓の申込證據金領收證が四十二圓見當をもつて盛んに賣買されたといふ事で戰後景氣の熱狂振りはもの凄い限りであつた。明治四十年は之等熱狂の反動が現はれ一月下旬